

江戸期における重商主義論の成立

——海保青陵と本多利明——

折 原 裕

はしがき

第1節 海保青陵の一藩重商主義論

第2節 本多利明の一國重商主義論

むすびにかえて

はしがき

支配階級による経世済民の思想という性格が濃厚だった江戸期の経済思想においては、「貴穀賤金」や「農本商末」という考え方が基調としてあり、そこでは、商品経済の中で商業の果たす役割は往々にして軽視され、また商業活動から生ずる商利も、なかなか正当な位置付けを与えられなかった。むしろ、とかく商利は、生産に寄与するところなく商人が手にする一種の不当利得であると受け止められて、しばしば儒教的な道德観から発する非難の対象となったのである。そうした商利否定論は、商品経済の発達につれて必ずしも弱まらず、商品経済の発達に伴なう武士の窮乏化や、その反面での商人の台頭が進むにしたがって、かえって強まっていく面を有していた。

そのような反動的な思想状況の中で、商人的な立場から商利否定論に対立し、商利肯定論を述べたのが、石田梅岩の商業職分論と山片蟠桃の自由市場論だった。

石田梅岩は、士農工商という身分的秩序を、言わば社会的な分業として

把握し直し、商業もまた社会に不可欠な一職分であると主張した。そうすることによって商利は、職分遂行に必要な生計費として、正当化されることになるわけである。梅岩によれば、商利はむさぼるべきものではなく、それゆえ正直や儉約という商道德が商人に厳しく要求されるとしても、商利自体は職分に見合う当然の報酬として肯定されるのである。こうした梅岩の把握は、商利否定論に明確に対峙しつつも、商利を儒教的な道德観の枠内で肯定しようとする議論の性格上、当時の道德観を越えて、商利を商品経済的な合理性から説明することはできなかった。

これに対して、山片蟠桃は、商利をめぐる商人の行動が需給の調整をもたらすという、商品経済的な合理性についてのすぐれた理解を示した。蟠桃によれば、商業は、需要が少なく相場の安い地方から、需要が多く相場の高い地方に、商品を移送することによって利を獲得するものである。それゆえ、商利は、需給を調整する相場の変動の中から生ずるのであり、そうした商利を目指す商人の行動が自由な限りにおいて、市場は需給を調整しうるのである。このように主張することで、蟠桃は、当時の道德観に束縛されることなく、商利を純経済的に合理的なものとして肯定できたのだ。しかしながら、蟠桃の場合、把握された商品経済の合理性は、商業内部の合理性にとどまっていた。蟠桃にとって、生産の問題は、すぐれて政治上の問題として、彼の自由市場論の圏外におかれる他なかったのである。

要するに、梅岩にせよ、蟠桃にせよ、商利と商利を生み出す商業を肯定しつつも、商業と生産とが相互に関連したかたちでの、商品経済のトータルな合理性認識に接近することはできなかった。その理由は、梅岩や蟠桃が商人的な立場に立っており、封建的な政治支配の管理下にあった生産に関して、遠慮なく論じうる位置になかったところにある。こう考えてよい。彼らは、当時の商人を代弁して商利否定論に鋭く対立したものの、その商利肯定論は、商利否定論へのアンチ・テーゼという性格を越えることがで

きなかった。したがって、彼らの議論は、まさに商利肯定論という言葉の枠を踏み越え切れなかったのである。

(以上は、前稿「江戸期における商利肯定論の形成——石田梅岩と山片蟠桃——」¹⁾の要点をかいつまんで述べたものである。)

こうして、梅岩や蟠桃の限界を越えて、商品経済のトータルな合理性認識に接近することは、商人的な立場にない論客の手にゆだねられることになった。武士階級出身の経世家であった、海保青陵がその人である。青陵は、利をすなわち理であると解することによって、利の世界としての商品経済をまるごと肯定した。その上で青陵は、武士も理としての利を軽視してはならず、積極的に利を追求して国富を増大させねばならないと主張して、生産の拡大策等を説いたのである。こうした青陵の経世論において、初めて商利肯定論の枠は越えられ、商品経済のトータルな合理性認識がひとまず形成されることになる。

青陵の経世論は、重商主義論という、江戸期経済思想の新たな展開を切り拓くものでもあった。だが、青陵の重商主義論は、一藩重商主義という部分対応にとどまっていた。一国重商主義という重商主義論本来の姿は、やはり武士階級出身の論客であった、本多利明の手によって初めて提示されるのである。

以下では、青陵や利明による、江戸期における重商主義論の初期の展開を、簡単に整理することにしよう。

第1節 海保青陵の一藩重商主義論

1

海保青陵は、宝暦5年(1755年)、丹後宮津藩青山家の家老を代々つとめる角田家の長男として、江戸に生まれた。²⁾藩政改革に従事していた父が、藩の内紛に巻き込まれて辞職したため、青陵は、わずか2歳で(教え、以下同じ)家督を譲られている。青山家の信任の厚い父は、青山家から手厚い経済的援助を終生にわたり約束されていたから、角田の家が生活に窮することはなかった。すぐれた儒学者でもあった父の影響で、青陵は幼い頃から儒学に親しんだ。

17歳のとき、父が尾張藩に召された折、青陵も尾張公に御目通りをなし、その後「留書」という役を仰せつかったが、青陵はこれを学問中として辞退している。青陵は、22歳のとき、尾張公御目見得を返上し、家督を弟に譲った。そして、弟を尾張藩に仕えさせる一方、自身は、養子であった祖父の実家の姓の海保を名乗って、日本橋に学塾を開いている。

しばらくして青陵は、「いつ暇をとりても、他家へゆきたきときにゆこうと自由なるゆえ」³⁾として、青山家の藩儒となり、藩主の長男、次男に書を講じた。その頃、藩主の求めに応じて、青山家の経済について思うところを書きしるしたことが、青陵の経世家としての出発点となった。草稿を見た父がこれを気に入らず、何度か書き直しを命じられた青陵が、儒者風に論ずることをやめて、実用本位な書き方をしたところ、父は大いに喜んだという。青陵の自由で率直な論法は、この頃に確立したらしい。

青陵は、30歳の頃伊勢へ代参をした以外は、江戸から遠方へ離れることはなかった。35歳のとき、「このようなることにては、文章の業成らず」⁴⁾と思い立った青陵は、青山家を辞してしまふ。青陵は、その後各地を足しげく旅行して歩き、見聞を広めた。「ゆくところには必ず逗留して書を講ぜ

り」⁵⁾との言葉が示すように、青陵は、各地の豪農や豪商に足を止めては、儒学や経世論を講義して、生活のよすがとした。「およそ東海道を往来にては十遍通れり。木曾を二遍、北陸道を一遍通れり。滞りてあそべるところは三、四十か所。山へ登りて見たること大小数百なり。」⁶⁾このように青陵が言うように、中年期の青陵は、遍歴の儒学者であった。

47歳のとき、尾張藩の藩儒が病気となったため、その代役として青陵は再び尾張藩に仕えることになった。江戸で3年間藩儒として暮らしたが、「江戸の水土、鶴〔青陵が自分のことを呼ぶ呼称〕あわず。あまた大病をやみたれば、また無理に御目見得を差し上げて江戸を出たり。」⁷⁾青陵は、またしても藩儒の地位を捨ててしまうのである。尾張藩への仕官を返上するのは二度目なので、問題がないわけではなかったが、大目に見てもらったらしい。

その後越後に1年、加賀に1年滞在してからは、青陵は、京都に居を定め、彼が最も好んだと言われる京都の地で、著作活動に力点を置いた生活を送った。『稽古談』を代表とする青陵の著作の大半は、この京都での晩年期に成立している。青陵は、「始終妻を置かず、妾を買わず、ゆえに子なし」⁸⁾という孤独の中で、文化14年（1817年）63歳で世を去っている。

2

海保青陵の経世論の特徴は、豊富な見聞に裏付けられた、現実主義にある。青陵によれば、当時の為政者が準拠する孔子や孟子の教えは、時代遅れの面がある。孔孟の教えは乱世の思想であり、治世にはそのままは適合しない。それを依然として孔孟の残した字句に頼って政治を取り行なおうとするから、国が富まず、武士が困窮するのだ。青陵は、このように旧守的な政治のあり方を批判する。青陵の言によれば、孔孟の教えとは別に、もっと現実的な学問が必要なのである。

こうして、青陵は、次のように言う。「学問と云うはいにしえのことにくわしきばかりのことにてはなきなり。今日ただ今のことにくわしきがよき学問というものなり。いにしえになき智恵が、今の人とり行なうにておし出たることはなはだ多し。およそ今の時にくらきは、むだ学問と云うものなり。升小〔升屋小右衛門、山片蟠桃のこと〕は学者なり。〔……〕身上をよするはずなり。武士の困窮するは、学問あしきゆえなり。孔孟の言を信じて、意を信ぜぬゆえなり。⁹⁾」

「孔孟の言を信じて、意を信ぜぬゆえ」武士が困窮するとの言葉から理解されるように、儒学者である青陵は、孔孟の教えを否定しようとするわけではない。青陵が批判するのは、孔孟の土俵に安住して、新しい現実を見ようとしなない、固陋な姿勢なのである。経済の問題に限定するなら、青陵の批判は、武士が利にうといということ、これに集約されると言ってよい。青陵が山片蟠桃を「学者なり」と評価するのも、「サシ米」（サシと呼ばれる竹の筒を米俵に差し入れて検査される際の米の目減り分を下付するよう願い出て、蟠桃は仙台藩の米の廻送費用をまかなってなお多くの余剰を手にしたと言われる、青陵は蟠桃のアイデアを「莫大の智」と絶賛しつつ、「サシ米」の総額を年間6千両と推計している）の工夫等から看取されるように、蟠桃が利にさといということ、この点にとどまると考えてよい。

「利は捨てべきものに¹⁰⁾あらず」¹¹⁾、「治世に利を捨てるは天理に¹¹⁾あらず」として、利の重要性を強調する青陵が、利の正当性を根拠付けるロジックは、次のようなものだった。「田も山も海も金も米も、およそ天地の間にあるものは皆しろものなり。しろものは又しろものをうむは理なり。田より米をうむは、金より利息をうむとちがいたることなし。山の材木をうみ、海の魚塩をうみ、金や米の利息をうむは天地の理なり。〔……〕田の年貢も、山年貢も、海年貢も皆息物〔利息〕なり。しろものを貸して利息を取るなり。この利息は取らねばならぬものなり。山師にても、何師にてもなし。天地の理なり。¹²⁾」

青陵は、このように、利がすなわち理であるとするのである。これは、利の世界としての商品経済を、理の世界として、まるごと肯定するものと見てよい。だから、それは、商利を含めて、商品経済を合理的なものとして把握しようとするものだと受け取ってよいのである。

上に見られるように、青陵は、封建地代としての年貢をも利として理解する。これは、経済外的な関係を経済的な関係に擬制することに他ならない。したがって、青陵の場合、往々にして、商品経済の内部と外部の区別は見落とされてしまうことになる。青陵が次のように、封建的な主従関係まで商品経済的關係として説明しようとしているのも、この点をよく示している。「いにしえより君臣は市道〔商人の道〕なりと云うなり。臣へ知行をやりて働かず、臣はちからを君へ売りて米を取る。君は臣を買い、臣は君へ売りて、売り買いなり。売り買いがよきなり。売り買いが悪しきことにてはなし。およそ売り買いのことは、君子のすることでない¹³⁾と云うは、皆孔子の利をいとうことを丸のみにして、のみそこのうたるなり。」

売買や利の追求を軽蔑する武士階級を啓発しようとする意図は理解できるとしても、青陵のように、商品経済外のものまで商品経済的に把握するとすれば、かえって商品経済の独自性はつかまれないままとなるきらいがあると言えよう。青陵の経世論は、利を理としてまるごと肯定するゆえに、商利肯定論としては明快至極であるとしても、社会を成立させている種々の理を利になぞらえてしまうために、経済的意味での本来の利の性格が、十分に明確化されない関係になるのである。

それはここではともかく、青陵は、武士も利の世界の住人であり、それゆえ武士も利を積極的に追求すべしと主張する。それは、彼が、儉約策だけでは武士は困窮から免れないと確信していたからである。青陵は言う。

「農、工、賈〔商賈、商人のこと〕は流行につれて取るもの増すゆえに入金多し。入金多きゆえに、出金多くなりてもつじつまも合うなり。武家は、取り物は昔の通りにて、出金は世の流行につれて多くなるゆえに、つ

じつま合わぬなり。」¹⁴⁾このように考える青陵は、出金を押さえる儉約よりも、入金を増やす「興利」を重視した。「興利は町家でいう金儲けなり」¹⁵⁾との言葉通りに、青陵は、武士に金儲けを推奨したのである。

孔孟の王道思想を一面で時代遅れと見る青陵は、治世においては霸道思想の方が適合的な場合があると考えていた。事実上、藩と藩とが経済競争を展開しつつあった当時、藩財政の困難を克服して武士の暮らし向きを維持するためにも、霸道思想の発想によりながら、他藩との競争に打ち勝つ藩経済の運営を行なうことが必要だと、青陵は考えていたのである。だから、青陵は、次のように述べることになる。「他国の貨財を自国へ吸い込む、霸道にて智の株しきなり。〔……〕今の世は隣国にも油断せられず、自国をも油断のう養わねばならぬ時なり。隣国にも油断ならぬと云うは、乱世の攻伐の類にあらず。売買損徳の事なり。隣国に心付けず、うっかりとしておれば、隣国にて、こちらの貨財をあちらへ吸い込む計策をするゆえに、油断ならぬと云うなり。自国をも油断のう養わねばならぬと云うは、隣国にて土の出〔土地からの生産物〕の多うなるようにするに、こちらの国にて工夫せねば、隣国は富みて、こちらの国は貧になるなり。隣国富みてこちら貧なれば、金銀は富みたる方へならでは流れぬものなり。ゆえにこちらの国をば富まさねば、他国へ富は流れゆきてしもうなり。もってのほかの事にてはなきや、一向にうっかりとしておるべきときにあらず。」¹⁶⁾

ここには、明らかに、藩を経済主体とする、重商主義の思想が述べられている。松浦玲氏の言葉を借りれば、海保青陵の経世論は、「藩単位の重商主義論」¹⁷⁾として特徴付けられるものだった。

青陵の重商主義論の長所は、他藩との交易の利益がもたらす国富の増大ばかりではなく、自藩内部の生産拡大の利益がもたらす国富の増大をも、忘れずに論じているところにある。「自国の土より物の生ずること多くなるは、王道にして仁の株しきなり」¹⁸⁾という視点も、また青陵のものであった。

青陵が卓越しているのは、そうした生産の拡大のための方策を、彼の実地見聞を生かして、具体的に論じていることである。彼は、丹波園部藩が、それまで零細な取引しか行なわれていなかった煙草などの産物を、藩で一手に百姓から買い入れて京都屋敷で売りさばき、成功した例を引きつつ、次のように言う。「最初より園部大きに利を得たり。その後はいよいよ百姓をせぐりて〔急がせて〕産物を出さず。これ百姓ども大きに喜ぶ理なり。百姓喜ばば、百姓うかるるなり。おのれが労をもうち忘れて産物をやたらに出す心になるゆえに、産物多う出るなり。」¹⁹⁾ここには、藩が行なう交易そのものからくる利益ばかりではなく、そうした交易の効果としての生産の拡大の利益が、志向されていると見てよい。

青陵は、この他にも、大和芝村における、和州繩の「かせぎまし」（一日の縄ない仕事を終えたのち、百姓に少しの夜なべをしてもらい、生産量を増やす工夫）を紹介したり、その応用として、海浜ならば塩魚などを増産させて掛け銀として積み立てさせる「しろもの無尽」ということも有効であると提案したり、生産拡大のための方策を各種説明している。それも、「民を鼓舞するほど富国の急務はなし」²⁰⁾という、生産拡大志向からであった。安丸良夫氏の言葉を借りるなら、青陵の重商主義論は、明らかに「拡大再生産という方向を向いている」²¹⁾のである。

青陵の面白いところは、「治世には武士はいらぬものなり」²²⁾、「武士上より取る米を、うっかりとむしゃむしゃと喰うてしもうて、何もせずにおること、あほう、不器用になる理なり」²³⁾として、武士にも武具を作るなどの内職を奨めていることである。そのことの経済効果のほどはともかく、青陵の生産拡大志向がかなり徹底したものであることは知られよう。

石田梅岩の商業職分論には、生産の観点はほとんどなかった。また、山片蟠桃の自由市場論には、生産の観点はあったけれども、その生産は、政治の領域として、蟠桃の自由市場論の外部に横たわる関係にしかなかった。これらに対して、青陵の重商主義論は、生産の問題を、重要な問題とし

て、彼の重商主義論の内部に提起することができたのである。それは、おそらく一部は、青陵が上級武士階級の出身であったことからくるものであろう。たぶん青陵は、政治に関与しうる階級の出身者として、政治が大半を支配していた生産について、縦横に論ずることにためらいがなかった。青陵の生産拡大志向は、こうした出自に裏付けられていたと思われるのである。

3

青陵の生産拡大志向をさらに徹底させるとするなら、それは、資本蓄積の推進とまではいかないにしても、生産者の生産能力の強化が、すなわち、生産者の手に生産拡大の成果が一定程度フィード・バックされることが、構想されてよいはずである。そうでなければ、次のような青陵の視点も真に生きてはこないだろう。「武士はとかく町人の富をねたむ、国貧なるゆえなり。〔……〕富めるは出精し勉励するゆえに富むなり。貧なるは懶怠にてずるけゆえに貧なるなり。ずるけものを愛して、出精するものを憎めば、土地より出るものだんだん少のうなる理なり。」²⁴⁾

そしてまた、「およそ直値段〔公定価格〕などと云うこと、はなはだむつかしきことなり〔……〕抜け荷あるはずなり」という市場メカニズムについての認識が青陵のものであった以上、彼の生産拡大志向は、山片蟠桃の自由市場論を生産部面にまで拡張した議論に、つまり流通のみならず生産をも市場の調整機能にゆだねる方向の議論に、帰着してよいはずである。実際、「米などは相場とんと外と違えば、つい他国の米も自国の米も出るなり」という青陵の発言は、蟠桃の自由市場論を彷彿するものだったと言てよいのである。²⁶⁾

ところが、青陵においては、上のような方向に議論が徹底することはなかった。青陵の場合、市場の調整機能が視野に入りつつも、その調整機能

が指し示す需給の均衡や生産の増進ということは、必ずしも見通されない。むしろ、彼の場合、需給の均衡や生産の増進へと向かう市場での個別的な運動を、いかにして政治の担い手である武士階級の利得に転ずるか、という点に視線が集中してしまうのである。

そうした青陵の姿勢は、彼が多用する「まきあげ」という言葉に集約的に表現されている。青陵の関心は、市場の運動そのものにはなく、市場の運動にあらがうことなく、市場の運動に追随しつつ、そうした運動の成果を為政者の手に「まきあげ」るところにあった。相場の変動の独自性や、それへの対応としての生産の自然成長性は、そういうもの自体として客観的に把握されることを逸して、為政者に片寄った視点から、相場への介入の無益と、生産の成長性を利して税収を余計に「まきあげ」る必要とが、政策として把握されるにとどまるのである。

このような青陵の限界は、言うまでもなく、彼が武士階級の出身であったことに関連している。青陵の場合にしても、その経世論の主眼は、武士を窮乏化から救済することであり、彼が志向する生産の拡大も、そうした武士の救済に役立つ限りでの生産拡大に過ぎなかった。武士出身であるがゆえに生産が視野に容易に入りうる利点は、同時に、生産が武士のための「まきあげ」の対象としてしか視野に映じないという、欠点としても作用したのである。

そういう欠点を助長したのが、彼の「愚民思想」²⁷⁾であった。それは、次のような発言に如実に読み取ることができる。「およそ百姓というものは、なんと云うても律儀なるものなればこそ、その領主の召し上がられたる箸で物を食えば、瘡疾〔ぎゃくしつ、熱病〕などは即座におちることなり。これほど領主の靈威あるものなれば、植え付けたるものを領主へ御覧に入れたれば、名前を書き出せと仰せ出されたというても、有り難がりて泣くものなり。況んや手ずから下さるほどのことでもあれば、命をかけても出精する心になるは百姓なり。」²⁸⁾このような感覚が背後にあるとすると、青

陵が推奨する「民を鼓舞する」ということの内容にも、はなはだ心もとないものがあると言わざるをえない。

「金銀なども等分にゆくべきなり。まきあげ過ぎれば下が極無になる。凶なり。まきあげきかねば上が極無になる。凶なり。」²⁹⁾ こうした言い方を見る限りでは、青陵の「まきあげ」による増税策は、中庸をゆくもののように受け取られうる。しかしながら、事実上それは、生産者の手に生産拡大の成果を分配するものとは言い難かった。一方で青陵が、以下のように、庶民の奢侈の厳しい抑制を要求しているからである。「今の民は昇平になれて、有り難いと云うことをうち忘れ、暖衣飽食をしても楽と思わぬは、なれてなれこになりたるなり。〔……〕今まで木綿の衣を着ておるを、絹布を着せたらば小言を云うまいと思つて、絹布を着せる。絹布になれる、また民小言を云うなり。〔……〕民をばあとの方へ退けるようにするがよきなり。あとの方へあとの方へとすれば、また民あとの方がなれるなり。なれて見ればまた苦しきこともなきなり。〔……〕下がり下がりしたるとんとの行き当たりを見るべし。草木と云うところへ行くはずなり。目当ては草木というところまでやろうと極めるなり。」³⁰⁾

このように、「草木」が民の理想像であるとするなら、青陵の政治目標が達成されたとき、生産の担い手である庶民の生活に向上はないことになる。それは、生産の拡大を志向する青陵の経済観を、少なからず裏切るものであろう。青陵の場合、政治観と経済観とは、無意識のうちに齟齬をきたしているのである。こうした政治観と経済観との齟齬が生ずるのは、ひるがえってみれば、彼の経済観そのもののうちに起因している。

青陵の、利がすなわち理であるとする経済観は、この時代とかく否定的に受け取られていた利の世界としての商品経済を、理の世界として、まると合理的なものとして肯定するという積極的な面を有していた。そして、青陵は、その利の世界の中に、石田梅岩や山片蟠桃が排除していた生産の問題を収容することで、彼の利の世界を、より包括的な姿で提示しえ

たのである。青陵の経済観が、梅岩や蟠桃の限界を越えて、商品経済のトータルな合理性認識に接近できたと評価しうる理由も、そこにあるわけである。

とは言え、その反面として、青陵の場合、利が理に直結されるために、利の世界はいきおい理の世界のうちに溶解され、利の世界に独自の論理は的確にはつかまれないままとなるきらいがある。青陵においては、商品経済の独自性という認識が、希薄になるのである。それは、すなわち、商品経済的な原理と商品経済外的な原理との区別、商品経済の内部と外部との区別、これらが不分明になることであった。

こうして、青陵の場合、制度や法の合理性と、商品経済の合理性とは、しばしば同一視されてしまう。たとえば、次の発言がそうである。「形名参同〔法家の用語、名実の一致を目標に賞罰を行なうこと〕は天地の理なり。〔……〕死罪の人を死罪にするは、売り買い算用はっきりと決まりたるなり。天子とめても役人がってんせずに死罪にすることは、天子の御意よりも天の理が重きゆえなり。〔……〕死罪をゆるめて流罪にするというは、三十匁に売るべきしろものを十五匁に売るなり。十五匁に買うべきしろものを三十匁に買うなり。形名参同にあらず。³¹⁾」

このように、制度や法の合理性といった政治的な合理性と、経済的な合理性とが同一視されるために、青陵においては、経済的な合理性が要求するはずの政治の革新は、明確に意識されることがない。彼の場合も、当時の通例にもれず、この頃あらわになりつつあった政治と経済の桎梏は、それとして自覚される道を閉ざされ、政治と経済の不整合は、深刻な桎梏としてではなく、たかだか政治の側の対応の遅れとして意識されるにとどまるのである。

青陵の重商主義論が、一藩重商主義という部分対応に自足できる理由も、おそらくその一端はここにあると言ってよい。藩ごとの経済政策についてはあれこれ提言する青陵も、各藩の経済政策をおおもとで規定する幕

藩体制については、何ら言及しようとしていない。「天下のことは鶴の知らぬところなり」³²⁾、「鶴、江戸の大政は知らず、言わず」³³⁾というように、幕藩体制について固く沈黙することが青陵のモットーだったのである。

第2節 本多利明の一国重商主義論

1

本多利明は、寛保3年(1743年)、越後国蒲原郡に生まれた³⁴⁾。父は加賀藩浪人であったとも言われているが、明確なところはわかっていない。利明は、算学に志し、18歳で故郷を捨てて江戸に出ている。

江戸に出た利明は、今井兼庭に師事して、関流算学を学んだ。伝えられるところでは、利明は、関流の最高の秘伝にまで到達している。のちの寛政6年(1794年)に流祖関孝和の碑が再建されたとき、利明の名が門弟の筆頭としてあがっていることなどからしても、利明が関流の重鎮とも言うべき位置にあったことは争えないようである。一方、利明は、算学の師今井兼庭の同門である千葉歳胤から、天文・暦学をも学んでいる。また、山形大弐(明和事件で幕府に対する不敬をとがめられて死罪となった兵学者)から剣術を習ったとも言われるが、確かなところはわからない。

利明は、一通りの修業を終えたのち、24歳で江戸音羽町一丁目に、算学と天文の私塾を開いた。開塾後は、数学上の著作を次々ともものして、関流の諸術を尽くし、さらにヨーロッパ数学にまで及んだ。利明は、司馬江漢(わが国で初めてエッチングの技法を用いた画家で、『銅版地球全図』等の刊行を通じて、地動説の普及につとめた)などの蘭学者との交流も通じて、次第に蘭学への傾斜を強めていった。

天明7年(1787年)、利明は東北地方を旅した。この頃は天明の飢饉のただ中であり、江戸では米価の暴騰を契機とする打ちこわしが起こり、他方

伊丹などの酒どころでは酒造米の消費が止まないというように、当時の経済システムは危機に直面していた。利明が訪れた東北地方では、打ち続く冷害のため、おびただしい餓死者が出ていた。利明は、東北の惨状を実見して、大変な驚きを覚えた。利明が飢えに苦しむ人たちに銭を与えようとしたところ、その人たちの答えるに、「この地は銭ありても用をなさず〔……〕この十四五里四方の民みな死に絶えてより、売り物ありても、買う人なし³⁵⁾」という、手も付けられない状況だったのである。利明の経世家としての発言が目立つようになるのは、この東北旅行以来のことだった。『経世秘策』、『西域物語』など、蘭学の影響の色濃い経世論の代表作は、東北旅行後の時期に書かれている。

一方、利明は、蝦夷地の開発にも並々ならぬ関心を抱いていた。天明5年（1785年）に田沼意次が派遣した蝦夷調査隊には、門弟の最上徳内を参加させている。徳内は、その後も何度か機会を把えては蝦夷や千島・樺太におもむき、『蝦夷草紙』、『蝦夷草紙後編』などを著わして、言わば蝦夷の専門家となった。利明も、徳内の報告に基づき、幕府にしきりと蝦夷地の開発を献策したが、田沼意次失脚後の松平定信政権は蝦夷地の開発に消極的だったから、利明の献策が容れられることはなかった。その後利明は、享和元年（1801年）には、幕府船凌風丸の船頭として蝦夷に渡ったりもしているが（利明は西洋航海術にも詳しかった）、熱意を喪失したのか、彼の蝦夷地開発論はこの頃以降発展を見ていない。

利明は、文化6年（1809年）、67歳で加賀藩に仕官した。天文・洋学者として、二十人扶持を給せられたという。加賀・金沢に滞在中は、藩主前田侯にヨーロッパの情勢や軍艦の操縦法などを講じたらしい。利明は、1年半ほど金沢で暮らしたのち江戸に戻り、加賀藩の扶持米で生活を続けた。謹直な学者として衆目が一致し、その反面誇張癖もあったという利明は、文政3年（1820年）、78歳で世を去った。利明にはひとり娘があり、女流算学者である一方、琴の妙手で、幕府大奥や紀州侯屋敷に出入りしていたと

伝えられている。

2

本多利明の重商主義論は、統一国家としての日本を前提とした一国重商主義論である点で、海保青陵の一藩重商主義論とは一線を画するものだった。青陵の経世論は、豊富な実地見聞に裏付けられてはいたが、その見聞は国内の経済事象に限られていたし（ただし、青陵に西洋への知識がなかったわけではない³⁶⁾）、青陵は言うなれば儒学の伝統の中に自己の思考を閉じこめていたから、青陵の重商主義論が西洋との比較において一国重商主義論の形を取ることはなかった。これに対して、利明は、自然科学者として西洋への関心が深く、書物などからイメージした西洋と日本とを比較しえたから、利明の重商主義論は一国重商主義論の形を容易に取ることができた。利明の経世論の出発点が、「日本に生をうけたる者、誰か国家の為を思いはからざらん³⁷⁾」というナショナルな思いにあったことと、利明の重商主義論の力点が、「日本は海国なれば、渡海、運送、交易は、もとより国君の天職最第一の国務なれば、万国へ船舶をやりて、国用の要物たる産物、及び金銀銅を抜き取りて日本へ入れ、国力を厚くするは海国具足の仕方なり³⁸⁾」というインター・ナショナルな主張にあったことと、両者は表裏一体の関係になるのである。

利明が国際交易を国力向上の要と考えた背景には、人口の増加についての彼独特の理解があった。利明の「マルサス的人口論³⁹⁾」と呼ばれているものである。利明の計算によれば、夫婦が33年間に17人の子をもうけるその間に、第一子は9人の孫をもうけ、第二子は8人の孫をもうけ、第3子は7人の孫をもうけという連鎖が続くので、人口は33年間に19.75倍となる⁴⁰⁾。人口がこのような高率で増大するなら、当然その人口を養うべき生活資料は不足する。「三拾三年の内に日本を拾九倍七分五厘押し広めざ

れば、産業不足するの道理なり⁴¹⁾」ということになるわけである。

利明の「マルサスの人口論」と、Th・ロバート・マルサスの『人口論』との間に直接の関連は何もないが⁴²⁾、人口の急増を根拠に生活資料の不足を説明する論法は共有されていると言ってよい。こうした論法の先にロバート・マルサスが用意していたのは、周知のように、貧困はある意味で止むをえないという結論であった。利明の方は、こうした結論は共有しえなかった。放置するなら避けがたい貧困を何としても避けよ、というのが利明の要求だったし、貧困を避けるために国際交易は不可欠だ、というのが利明の結論だったのである。

つまり、利明には国内生産力のどうしようもない限界という観念があり、「マルサスの人口論」はその一表現だと見てよいのであるが、そうした国内生産力の限界を突破する方策として一国重商主義は提起されていることになる。「際限ある土地より出産する産物は、出産に際限あり、年々に出産する国民は、年々に増殖して際限なし⁴³⁾」、「その国より産まるるところの物を用いて、その国を養わんとすれば常に用足らず⁴⁴⁾」、こうした観念が利明の重商主義論の根本にはあった。

国内生産力の限界という利明の観念は、明らかに、天明飢饉時の東北旅行の体験に発している。「天明癸卯〔みづのとう〕以来〔……〕凶歳飢饉にて、奥州一ヶ国の餓死人数二百万人余〔この数字には誇張がある〕⁴⁵⁾」という惨状の体験が、利明にとって一種の原体験として作用していると受け取ってよい。そして、利明の場合、飢饉という異常事態の体験が、時間的にも空間的にも一般化されて、直ちに国内生産力の限界という観念を導くのである。

利明は、東北旅行の際に伝え聞いた乳児のいわゆる「間引き」が、深いいきどおりとともに記憶に残ったようで、その非人間性を繰り返し難じている。「人間界に生まれ来る我が子を我が手に掛けて殺すと云うは、その胸中云わんさまなし。禽獣だに我が子の慈愛を知らざるはなし。況んや人

に於いてをや。〔……〕皆国君の罪科に帰すべし。〔……〕天罰も遅きものかなと、我を忘れて憤怒の心の生まるる⁴⁶⁾と、厳しい調子で利明は述べている。利明のヒューマニストとしての側面が、よく垣間見えるくんだりと言うべきだろう。

利明は、愚民思想の持ち主だった海保青陵とは異なり、貧しい農民に同情的だった。利明によれば、苛斂によって農民を苦しめるのは、生産力の限界をわきまえない、誤りである。苛斂によって農民を苦しめれば、農村は疲弊して、生産力はさらに低下する他ない。こうした関連を見ようとしなない為政者を、利明は次のように批判する。「神尾氏〔享保の改革の末期に勘定奉行をつとめた神尾春央、隠し田の摘発や厳しい収穫量調査によって税収の増大をはかった〕が曰く、胡麻の油と百姓は、絞れば絞る程出るものなりと云えり。不忠不貞云うべきなし。日本へ漫〔みだ〕る程の罪人も云うべし。⁴⁷⁾」

こうしたところからも了解されるように、利明の重商主義は、ひとり為政者のためだけの重商主義ではなかった。一国重商主義の推進者としての為政者の役割に強く期待しながらも、利明の重商主義は、「天民にして預かり者〔……〕一人にても大切の天民⁴⁸⁾」のためのものであり、「万民の飢寒を救助するの制度⁴⁹⁾」だった。海保青陵の「まきあげ」を主眼とした重商主義とは、大いにおもむきを異にしているのである。

ところで、国内生産力の限界という問題意識から発する利明は、国内生産力の増進という自然な方向へはほとんど思索を進めていない。利明においては、国内生産力の限界が、言わば一直線に、国際交易に活路を求める関係になるのである。それはなぜかと言えば、利明の場合、わずかな体験を抜きにすれば、経世的思考の糧は、書物から得たヨーロッパの知識であり、彼の知識の中でのヨーロッパは、何よりもまず、国際交易を主たる手段として、富裕を蓄積した諸国だったからである。「欧羅巴諸国は、国王あって万民を撫育するに、渡海、運送、交易をもって、飢寒を救うを国王

の天職とせり。ゆえに盜賊などは決してなし。」⁵⁰⁾これが、利明のヨーロッパ観だった。つまり、利明の重商主義は、ヨーロッパを理想化し、そのように理想化されたヨーロッパを追い求めるという性格を持っていたのである。

利明がヨーロッパを理想化してしまうのは、彼のヨーロッパに対する知識が正確でなかったこともあるが、儒教や仏教など伝統思想への懐疑も一方で作用していた。こうした伝統思想に影響されて、日本の政治はあるべき姿を失なっているというのが、利明の見方だった。だから、利明は、儒教に対しては、「古今の諸儒口に慈悲を説いて心に得ず」⁵¹⁾と批判するし、仏教に対しては、「仏法という横道」⁵²⁾によって科学的方法が普及しないと批判することになる。

もちろん、そこには、数学者としてスタートした自然科学者として、ヨーロッパの科学に憧憬する面もはたらいていた。利明にとって、「算数をもって台〔土台〕となし、天文、地理、渡海の道に透脱」⁵³⁾することが国務の基本であったから、重商主義を論ずる場合にも、科学的方法は不可欠の位置を占めていた。「万国の力を抜き取るには、交易を用いて抜き取るの外なし。交易は海洋渉渡するにあり。海洋渉渡は天文、地理にあり、天文、地理は算数にあり。」⁵⁴⁾利明の重商主義には、こうした主張も含まれていたのだった。

ヨーロッパの国力や科学を理想化するあまり、利明は、彼の地の制度や思想をも、ほとんど手ばなしで理想化してしまう。たとえば、利明は、カーディナルによるローマ教皇の選挙を、世俗的な国王の選挙と誤認し、「王子たりといえども、帝業の位に不相当の人物は、帝位を継がしめず」⁵⁵⁾と過大評価している。また、彼は、キリスト教を「ジュデヤの良法」⁵⁶⁾として美化したり、さらに、「欧羅巴諸国の治道を探索するに、武を用いて治むる事をせず、ただ徳をもって治むるなり」⁵⁷⁾という賛美も行なっている。

ここまでヨーロッパが理想化されるのであれば、利明のヨーロッパ像は、実態を離れたユートピアでしかないことになる。そして、そうしたユートピアとしてのヨーロッパを追い求める彼の重商主義もまた、ユートピア的であることを免れない。利明の重商主義が、その推進主体は具体的には誰なのかという問題を初めとして、具体性を著しく欠くのも、その反映である。利明の重商主義は、この点では、海保青陵の重商主義に遅れをとっていた。

3

利明の重商主義の最大の問題点は、その商業観にある。為政者の手による重商主義という議論の性格上、商業の機能が重視されてよいはずなのに、利明においては、必ずしもそうではなかった。利明は、為政者の手に帰するであろう商利の大きさに目を奪われて、商業の機能それ自体を十分に把握し切れないのである。

利明の場合、商業への内在が不徹底なために、商利という商業の果実だけに目が向いてしまう。そこには、相も変わらぬ富商憎悪も作用していた。それを、利明は、次のように表明している。「愚、ここに当時商賈の収納を探索するに、日本国を十六分にして、その十五は商賈の収納、その一は武家の収納とせり。その証拠、羽州米沢及び秋田仙北郡辺りの米、豊作の節は、一升代錢五、六文なり。交易の上商賈の手に渡り、江戸に到れば、豊凶の差別なくおよそ百文となる。この割合をもって金一万両を元入れとなし、羽州の米を買い入れ江戸に廻し、売り払い高、金十六万両となる。⁵⁸⁾」ここには、当時すでに時代遅れとなりつつあった、商人憎しの感情が見え隠れしている。利明は、別の箇所では、「いかに商賈の家業なればとて、大造なる国賊なり⁵⁹⁾」とまで言っているのである。

このように、商業蔑視の感情が前面に出てきてしまうとき、商業の機能

を客観的に把握することが困難になるのは、止むをえないところであろう。利明の商業観は、海保青陵のそれより大幅に後退し、ほとんど商利否定論に近いところまで後退していると見てよい。利明において、商利は、商業の果たす固有の役割から切り離されて、ただ利得として、それも一種の不当利得として、把えられるに過ぎないからである。

だからまた、利明において、商業の機能を媒介に成立する市場メカニズムは、十分に認識されることがない。「渡海、運送、交易は国君の天職なれば、商民に任すべきにあらず。もし誤りて商民にのみ任するに於いては、奸計貪欲をほしいままにするゆえ、国中の諸式の値段平均することなく、莫大に相場同じからず⁶⁰⁾」というのが、利明の市場認識であった。

それゆえ、相場は、利明にとって、自然に放任するべきものではない。むしろ、相場は、操作の対象でなければならないことになる。たとえば、米相場について、利明はこう言っている。「それ米値段は諸穀の値段の兄にて、一切の食物の値段に響き、米値段高下によりてまた高下をなすものにて、大切な値段なれば、商賈の預かるべきにあらず。国君の天職に掛かれれば、是非有司あって司さどるべきは米相場なり。」⁶¹⁾では、為政者は、どうやって米相場を操作したらよいのか。利明によれば、為政者があらかじめ米をプールしておき、相場の上下に反するような売買介入を行なえばよい。つまり、利明が提案するのは、「自然相場を台となし、これより高値、下値ともに一、二割のうちは館より交易を発せず、もしこれより高値とならば、館より払い出し、もしこれより下値とならば館より買い上げ⁶²⁾」という介入だった。

ここでは、生産の観点は、まったく欠落していると言ってよい。利明の場合、生産の問題は、生産力の越え難い限界という観念によって棚上げされてしまう。そのため、需給の調整は、生産の増進に求められるのではなく、独占的供給者としての為政者による、流通への介入に求められる関係になるのである。

利明においては、商業の機能や、その生産への反映といった点は、十分理解されないままに終わり、だからまた、市場メカニズムの合理性も、十分理解されないままに終わることになる。むしろ、彼の場合、商業や市場メカニズムに対する不信感からこそ、為政者による商業経営という発想が生じてくると考えてよい。利明は、市場の合理性に期待しないで、政治の合理性に期待したのである。

このように見てくると、利明は、経済の合理性に関してペシミストであった反面、政治の合理性に関しては、いたってオプティミストであったことになる。利明は、彼が告発する農村の惨状を、おそらく政治と経済の桎梏とは認識していない。政治と経済の桎梏は、利明の場合、政治の経済に対する支配不全として、つまり、政治の経済支配が可能だとの大前提の下に、政治の力能の発揮の不完全として知覚されている。そして、そうした文脈の中で、政治と為政者とが、強い期待を込められつつ、告発されているのである。

したがって、利明の重商主義にアキレス腱があるとするなら、それは、やはり為政者の性格ということになる。利明が強く推奨する国際交易にせよ、また彼が一時執心した蝦夷地等の北方開発にせよ、海保青陵が提唱するような一藩重商主義の枠内では、容易には推進しえない政策である。だからこそ、利明の重商主義は、一国重商主義として立ち現われてくる。そして、その重商主義を推進する主体は、鎖国を旨とする幕府ではもはやありえないはずである。この意味で、利明の重商主義論は、「旧来の幕藩政治に政策的な転換を迫るものであるばかりでなく、それを実施するには国民的・近代的規模の国家統一を必要とする⁶³⁾」面を確かに有していた。

しかし、利明は、そうした点に必ずしも自覚的ではなかった。利明は、国際交易にしても、北方開発にしても、それらの具体的な中身についてはほとんど考察していない。だからまた、そうした政策を実現すべき主体の性格についても、具体的に考える必要はまだなかったと見ることもでき

よう。利明の重商主義の抜き難い抽象性が、その重商主義の実現主体をも、抽象性のただ中に埋没させたままに置くのだと言ってもよい。利明においては、ヨーロッパの重商主義が遠い異国の事柄に属していたのと同様、日本で実現されるべき重商主義も、まだまだ遠い将来の事柄に属していたのかも知れない。

むすびにかえて

海保青陵の重商主義論の特色は、その具体性にあった。青陵が行なった政策的提言は、すぐにも実現可能な性格を持っていたし、一藩重商主義という議論の構造も、実現可能性という点から見るなら、欠陥とは言い切れない側面を有していた。

青陵は、経済合理性の把握に関しても、すぐれた現実感覚を示した。利がすなわち理であるという受けとめ方自体に問題がないわけではないが、当時めざましく成長しつつあった利の世界を、理の世界としてまると肯定しようとする青陵の姿勢は、商業や市場メカニズムの合理性認識に接近する上で、少なからぬ役割を果たしたと言ってよい。

これに対して、本多利明の重商主義論は、理想化されたヨーロッパを追い求めるという面が強く、そのため具体性に乏しいという欠点があった。一国重商主義という議論の構造も、重商主義の本来の姿を志向するものとは言え、重商主義を推進する主体の形成について論じないのであれば、そこからくる抽象性はおおむねもない。

利明の場合、経済合理性の把握も不確実だった。利明には、政治の合理性に期待するあまり、経済の合理性を見落としてしまうところがあり、そのため、当時発展を遂げつつあった商業や市場メカニズムも、政治的な操作の対象として、矮小化されて把握される他なかった。

しかしながら、江戸期におけるその後の重商主義の展開に目をやると、

受け継がれてゆくのは、利明型の重商主義であった。それは、ヨーロッパの日本への脅威が高まるにつれて、一国重商主義の推進主体たるべき統一国家の形成が、現実性を帯びざるをえないという、歴史の流れに呼応した、経済思想史の展開過程だったと言ってよい。

そうした中で、利明の重商主義に含まれるヒューマニズムや貧しい農民への共感も、受け継がれることなく風化してゆくことになる。もともと、そうしたものは、利明の重商主義の骨格の位置を占めてはいない。むしろ利明の重商主義では、為政者の役割が強く期待されるため、ヒューマニズム等の実現も為政者まかせであった。だから、それらが風化してゆくのも、無理からぬところではあった。

とは言え、青陵や利明以後の、江戸期重商主義の本格的展開について述べるのは、他日を期すことにしたい。

- 注 1) 折原裕「江戸期における商利肯定論の形成——石田梅岩と山片蟠桃——」(『敬愛大学・研究論集』第42号, 1992年9月)。
- 2) この項の記述は、『海保青陵全集』を編纂された蔵並省自氏の著作『海保青陵経済思想の研究』(雄山閣出版, 1990年)に多くを負っている。
- 3) 海保青陵『稽古談』(『日本思想大系』第44巻, 岩波書店, 1970年) 344頁。蔵並省自編『海保青陵全集』(八千代出版, 1976年) 109頁。
- 4) 同上, 344頁。『全集』110頁。
- 5) 同上, 345頁。『全集』110頁。
- 6) 同上, 345頁。『全集』110頁。
- 7) 同上, 345頁。『全集』110頁。
- 8) 同上, 345頁。『全集』110頁。
- 9) 同上, 247~248頁。『全集』29頁。
- 10) 同上, 218頁。『全集』5頁。
- 11) 同上, 218頁。『全集』5頁。
- 12) 同上, 222頁。『全集』8頁。
- 13) 同上, 222頁。『全集』8頁。
- 14) 同上, 285頁。『全集』60頁。
- 15) 同上, 244頁。『全集』26頁。
- 16) 同上, 295頁。『全集』69頁。
- 17) 松浦玲「江戸後期の経済思想」(岩波講座『日本歴史』第13巻, 1964年)

- 131頁。
- 18) 海保青陵『稽古談』295頁。『全集』69頁。
 - 19) 同上, 241頁。『全集』24頁。
 - 20) 同上, 256頁。『全集』36頁。
 - 21) 日本史研究会編『講座日本文化史』第6巻(三一書房, 1963年)180頁。
 - 22) 海保青陵『稽古談』287頁。『全集』62頁。
 - 23) 同上, 289頁。『全集』64頁。
 - 24) 同上, 237頁。『全集』20~21頁。
 - 25) 同上, 261頁。『全集』40頁。
 - 26) 同上, 261頁。『全集』40頁。
 - 27) 小島康敬「海保青陵——その思惟構造——」(相良亨, 松本三之介, 源了圓編『江戸の思想家たち(下)』, 研究社出版, 1979年, 所収)124頁。
 - 28) 海保青陵『稽古談』297~298頁。『全集』71頁。
 - 29) 同上, 317頁。『全集』87頁。
 - 30) 同上, 310頁。『全集』81~82頁。
 - 31) 同上, 223~224頁。『全集』9頁。
 - 32) 同上, 310頁。『全集』81頁。
 - 33) 同上, 323頁。『全集』91頁。
 - 34) この項の記述は主として, 阿部真琴氏の論考「本多利明の伝記的研究(1~6)」(大阪歴史学会編『ヒストリア』第11、12、13、15、16、17号, 1955年2, 5, 8月, 1956年6, 9月, 1957年2月)に依拠している。
 - 35) 本多利明『西域物語』(『日本思想大系』第44巻, 岩波書店, 1970年)125頁。
 - 36) 海保青陵は, 蘭学者として名高い桂川甫周(幕府医師で, 『解体新書』の訳業に最年少で参加, 大黒屋光太夫の漂流記『北槎聞略』を編纂したり, 『地球全図』, 『和蘭葉選』等多くの著作がある)と若年の頃生活を共にしていたことなども手伝い, 蘭学や西洋事情に多少の知識はあったらしい。次のような発言も, それを裏付けるものと受け取ってよい。「阿蘭陀は国王が商いをするに云うて, どっと云うて笑うことなり。されども〔……〕物を売りにて物を買うは, 世界の理なり。笑うことも何もなきなり。」(海保青陵『稽古談』239頁。『海保青陵全集』22~23頁。)
 - 37) 本多利明『経世秘策』(『日本思想大系』第44巻)12頁。
 - 38) 同上, 32頁。
 - 39) たとえば, 塚谷晃弘「幕末近代思想の系譜(2)——子平と利明を中心に——」(『国学院経済学』第18巻第2号, 1970年11月)75頁。
 - 40) 本多利明『経世秘策』146~147頁。
 - 41) 同上, 147頁。
 - 42) 本多利明の「マルサス的人口論」が初めて述べられた『経世秘策』は,

Th・ロバート・マルサスの『人口論』が公刊されたと同じ1798年に書かれている。

- 43) 本多利明『経済放言』（瀧本誠一編『日本経済大典』第20巻，明治文献，1968年）204頁。
- 44) 本多利明『経世秘策』159頁。
- 45) 同上，27頁。
- 46) 同上，28頁。
- 47) 本多利明『西域物語』145頁。
- 48) 本多利明『経世秘策』32頁。
- 49) 同上，85頁。
- 50) 同上，20頁。
- 51) 同上，28頁。
- 52) 同上，55頁。
- 53) 同上，55頁。
- 54) 本多利明『西域物語』160頁。
- 55) 同上，99頁。
- 56) 本多利明『経世秘策』29頁。
- 57) 本多利明『西域物語』98頁。
- 58) 本多利明『経世秘策』33頁。
- 59) 本多利明『西域物語』153頁。
- 60) 本多利明『経世秘策』18頁。
- 61) 同上，34頁。
- 62) 同上，35頁。
- 63) 衣笠安喜『近世日本の儒教と文化』（思文閣出版，1990年）159頁。